



次 目

○本部圖報	○福島教信	○入帳報告
記 事		
修養の大要(一).....	本多日生	
立正安國論講話(第一講續).....	小林一郎	
本佛實在の宗教哲學(二十六).....	河合陟明	

財團 法人統一團趣旨

統一團ハ創立以來實ニ四十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正派ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追随ヲ許ササル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩同會等アリ其傳頌宣傳ノ如キ炎々タル遺念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ヲ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ執行セント欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
 第一佛祖正派ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ 教旨ノ正明 研學ノ淵遠 活動ノ旺盛 此等ハ統一團ノ標語ナリ
 寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切に懇望スル所ナリ

本團 畧 則

- 目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正派ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大道ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- 維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス
- 贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス
- 正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ提出セラルル方ヲ正團員トス
- 入團 御希望ノ方ハ住所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布ス
- 隨友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ隨友トス

修 養 の 大 要 (一)

本 多 日 生

世の中には信仰といふことを單に御利益のみに考へ、他力的に何等かの御利益を受けるといふことだけに考へて居る人も多くあるやうでありますけれども、佛教の根本精神から考へると、どうしても信仰は修養といふことと離れてはならぬと思ふ。それ故に今日は修養に關してその原則をお話して見たいと考へるのであります。

吾々人間の心は一つであるけれども、その働きは必ず二面になつて居るので、如何な人でも、心の働きの全部が明るい美しいといふ譯にはいかない。又如何なる人でもその心の働き全部が暗い、醜いといふものではない。必ずや美しい側と醜い側と、清い側と濁つた側との二面の精神發作といふものに依つて人間は動いて居るものである。低能白痴であれば、如何に修養を加へても、それは向上をする見込の無い者で、これだけは人間としての資格が無いのであるが、さうでない限りは、人間といふものは修養に依つて、その善き方面をより多く發達せしめ、惡しき方面を抑制することが出来るのである。又如何なる立派な人でも修養を加へずして、生れながらにして完備せる人格を有つといふことは先づ無いのである。殆ど無いといふよりは全く無いと言つて宜しいのである。孔子は聖人であるけれども彼は修養を加へてあれだけになつた。志を立て、道を行つて今日に至つたといふことを始終申して居る。決して自分は生れながらにして聖者ではないといふことを始終申して居る。釋迦如來は、内面から言へば佛として御降誕になつたのであるけれども、應同せられた人間としてお生れになつた側から眺めれば、釋迦如來もやはり發心修養に依つて成道を遂げられたのである。して見れば釋迦も孔子も修養無くしてあの地位に至つたものではない。古來から「何れ

の處にか天然の彌勒、自然の釋迦あらんや」といふ格言がある。天然自然に委せて修養を加へずに置いては、彌勒菩薩も出来なければ釋迦如来も出来ないで、菩薩の地位を得、後の佛様として出られるやうな彌勒菩薩も、又現に佛となつて出られた釋迦如来も、皆な天然自然になつたものではない。修養の結果に依つてその地位を得たものである。況してや衆生の低き側に於ては、修養を怠つて決して向上は無いついふことを申すのであります。

これは非常に大事なことであつて、人間と修養といふことは何よりも大切な關係を有つて居るのである。肉體は食物に依つて支へられて居るので、食物が無ければ人間は死んでしまふ。だから他のものは除くことが出来ても、食物を除くことは出来ない。着物は無くとも薬の中にもぐつて居つても生きて居られる。總ての物は無くとも生存することが出来る。今日でも穴居し居る蠻民などは、裸體で薬の中にもぐつて生活して居る人間もあるけれども、如何なる野蠻人と雖も、食物を搦らすして生きて居る人間は無い。であるから肉體の生存には食物が一番大事であるが、その食物と精神の修養とを比べた時に、古來食物は捨てても修養は捨てる事が出来ない聖人君子は皆言つたのである。それは修養を捨てれば、肉體は生きて居るけれども、人間の資格は滅びて居る。委だけ人間であつても、人間の資格を失うて居る。人間の資格を失つて生きて居るよりは、寧ろ死んだ方が宜しいといふことを申して居る。

それ程徹底的に人間には修養といふことが大事なのであります。併しそれが怠り勝になるのが人間の通弊である。ともすればかき濁しけり山水の澄ませばすまず人の心を

と明治天皇がお詠みになりましたが、如何にもその通り、ちよつと油断すると人間の心は直ぐ濁るのであります。「ともすれば」といふのは、僅かな不注意に依つて直ぐに濁つて来る。山水の清き流れも、ちよつと手を入れて搔きせば下の泥が浮いて来るが如くに、人間が外界の事柄に觸れば直ぐそれが爲に迷ひの心が起る。これは佛教では根塵相對と申して、吾々人間の有つて居る五根といふものと、外界の五塵といふものとの關係を説いて居りますが、人間の五根、即ち眼、耳、鼻、舌、身の五つが、色、聲、香、味、觸といふ外部のものに觸れるといふと、直ぐその間

に濁りを生ずると説かれて居る。海にその點に於ては人間は偉いやうでも、危い生活を過つて居るものである。ともすれば掻き濁るものが人間の心であるから、そこでどうしても修養を心懸けないといふと間違ひが起るのである。それ故に、又 明治天皇は

おのが身を修むる道はまなばなん 賤がなりはひいとまなくとも

と仰せられて、修養の事は、如何に忙しい、如何に貧しい生活をして居る者でも、これを怠つてはならないと仰せられて居る。兎角人間は「何分日々の生活に逐はれて居るものでありますから、修養ナンといふことに心を用ひることが出来ませぬ」「お寺に參つて信心をし、法話を聽くといふことは宜いとは思つて居ますけれども、何分忙しいものでありますから……」斯ういふことになりたがるのであるが、そこが大變間違つて居ると思ふ。無理にでも一般の用事は差繰つても、修養の事に心を用ひるといふ風習をもつと強くしなければならぬ。如何に社會の狀態が變化し、生活が困難を告げても「おのが身を修むる道はまなばなん」で、修養を輕んじてはならぬと思ふのであります。今日の時代はいろいろの事に於て修養に遠ざかるやうな有様であります。併し實際は時代の變化に就て一層修養の必要が強くなくなつて來て居ると思ふ。修養を疎んずる時代ほどより、修養を重んじなければならぬ譯であらうと思ふのであります。然らばその修養とはどうするのかといふと、これは古來の聖人賢者がいろいろ研究をして教といふものを立てて居る。教の大部分は修養のことである。教とは修養なりと言つても宜いほどに、東西古今の聖賢は皆な修養のことを説き教へられて居るのでありますから、その範圍も廣く方法もいろいろになつて居りますけれども、今はその綱領を抑へて、修養といふことの大體は斯ういふ有様のものであるといふことを概括して申して見ようと思ふ。

修養に就て第一に心懸くべきことは「養神」といふか、精神を養ふことである。この神を養ふことを第一に注意すべきであります。それはどんな事かといふと、人間の精神力には限りがあるのであつて、これを無駄遣ひをする入用の時分に精神の働きといふものが十分に行かなくなる。譬へて見ればランプに石油を入れて火を點して居る。無

駄な時分に火を明るくして、寝て居る時分にも點け放しにして置く、餘所へ行つて居る留守の間も點けて置くといふ風にすれば、石油は燃えてしまふ。ホヤは曇つてしまふ。芯には埃が溜つて薄暗くなつて来る。それを今度針仕事をするとか、書物を読むとかいふ時分に掻き立てて明るくしようとしても、ホヤも曇つて居れば、石油もだんだん乏しくなつて、いくら掻立てても油煙が立つばかりで明るくならない。斯うなつて来れば細かい仕事は出来ないのである。困つたナ、どうかして明るくならないか」といつて見たところが、石油が無くなつて居る。振つて見ても叩いて見ても仕方がない。底の方に少しでも石油があれば、水を入れれば石油が上の方に浮いて来て、一時は明るくなるけれども、その石油も盡きて水だけになればやはり消えてしまふ。それと同じやうな具合に、人間の精神を勞費すれば、必要な時分にうまく働かない。ところがその石油の少くなつたランプに水を入れて、上の方に石油を浮かして辛じて使ふやうなことを現代人はやつて居るので、直に石油が切れていよいよ眞暗になつてしまふのである。

先頃新聞を賑はして居るところの、妻子を殺して自分も自殺するといふやうなことを、神戸あたりでは三組も一日にやつて居る。大した理由はないが、神経衰弱が原因であらうと新聞には書いてある。女房を殺し子供を二三人も殺して、さうして自分も自殺してしまふ。これは神戸ばかりではない。全國を調べたならば、又母親が子供を殺して自分も死んだといふやうな出来事は毎日々々餘程澤山あるやうに思ふ。それを考へて見ると非常に氣の毒なことであり、可哀さうな事であらうと思ふ。或は又そこまで行かなくても、自分一人世をはかんで自殺するやうな人も非常に多い。自殺をしなくても、一つ自殺でもしようかといふほどの煩悶を有つて居る者は、實際死ぬ人間よりは又非常に多い譯である。

それから又一方に悪い事をする人間の方を考へると、これ亦非常に数が多いので、私は東京のさういふ犯罪者を扱つて居る検事の人に聞いた事がありますが、それは實にエライもので、三十人ぐらゐの検事が掛り切りで毎日々々夜が明ければ、各警察署からソロソロと引張つて来る者が何百人というてある。それで監獄の未決監ナンといふものは一パイで入れる所が無い。だから十疊敷ぐらゐの所に二十人も押込んで居る。又既決の監獄は犯罪者で満員である。

さういふ風に悪い事をしたたり死んだりするやうに國民の精神がなつて行き居ることは何であるかといふと、それはいろいろな原因もある。生活が困難であるとかいふやうなこともあるけれども、さうばかりではなからうと思ふ。日本の今日の經濟の状態、生活の状態に於て、それほど泥棒をしたり、自殺をしなければならぬほどのものではなからうと思はれる。これはやはりその人の精神力が足りない、心の力が足りない爲に起ることであらうと思ふ。死んで行くのと悪い事をするのとは非常に違ふやうだけれども、これは同じ病氣である。精神病者が自分で井戸へ飛び込むとか、刃物で自殺をするとかやり居るのが、一轉すればその刃物で人の頭を斬りに行つたりするのであつて、その陰と陽との變り具合は同じ病人である。だから泥棒をして監獄に行くのも、堺の濱からトボンと飛び込むのも同じ病氣であつて要するにその人の精神力の足らぬ結果であらうと思ふ。

さうしてそれは前に申す人間の精神を無駄遣ひをすることから起ると思ふのである。無駄遣ひといふのはどういふことかと云へば、つまらぬ事に心を無暗に勞するのである。無駄な事を考へずに仕事なら仕事に専注して、自分の爲すべき仕事にのみ精神力を使つて行くならば、さう人間は疲れるものではないけれども、餘計な事を考へて苦しむのである。婦人の人などはその點に於ては殊に注意しなければならぬと思ふ。現代は婦人の頭も相當疲れて居ると思ふ。婦人に神経衰弱の人も多し、細の強い人も多し、いろいろ婦人にも精神虚弱者があると思ふのでありますが、それはやはり無駄な事を考へ過ぎるのである。成べく事の無い時分休養をして居る時、寝る時、その他の場合に於ては心を裕かに平和に有つて行くといふ習慣が非常に大事だと思ふ。何でも無い時一人火鉢に向つて居るとか、机に凭れて居るとか、寝轉んで居るとかといふ時に、無駄な事を考へ過ぎる。その考は何の役にも立たぬ。さうして氣持の悪い方をより多く考へる。人間は氣持の悪い事を考へれば頭が疲れる。不愉快な感じは直に人間をして疲勞せしむるものである。善い方の氣分を考へれば、それは精神が養はれて来る。ちようど毒を飲むのと薬を飲むのとの違ひのやうな

ので、嫌な事を考へるのは毒を飲むのと同じ關係である。ところが婦人に就て言へば、婦人のいろいろ考へることの中にも、善い事と悪い事とあるのだけれども、善い方を餘り考へないのが婦人の性癖といふことに心理學的にはなつて居る。これは洵につまらぬ事だと思ふ。自分にも心持が良いやうに考へられる事はあまり考へないで、人に就て言へば、あの人が斯ういふことをしたとか、あの人が斯ういふ事を自分に與へたとか、斯ういふ時に斯ういふ事を言つたとかいふことを考へる。或は又生活の事でも、自分の家の生活が例へば百圓であるならば、三十四で一箇月暮して居る人の事を思ひ、乞食をして居る人の事を思へば、百圓の生活は結構であると言はなければならぬ。ところがさうは考へない、隣りが二百圓の生活をして居る。向ひが三百圓の生活をして居る。「こつちは百圓の生活しか出来ない、いまいましい」といふやうに考へると非常に不愉快になる。着物にしたところがさうである、裸で居ることを考へたならば、木綿の着物でも、濼く着て居れば結構である。ところがあの人は絹の着物を着て居る、あの人は金紗の着物を着て居る。「それなのに自分は木綿しか着られない」と考へれば、そこに不愉快がある。總て考へ方が女の人は不愉快的に考へ過ぎるといふことが書物に書いてある。私は直接女の人に就て調べたことはないからわからないけれども、書物にはさういふ風に書いてある。さうすると不愉快にものを考へれば疲れるのであるから、そこで婦人に神經衰弱者が起る。頭痛がする、気分が悪い、今日も頭が重い。起きられないと言つて一日寝て居る。斯ういふことは一生の中に自分自身も損であるし、家庭に於ても多大の損失を與へ、周囲の者も不愉快を感じる譯であつて、餘程氣を附けなければならぬ點であらうと思ふ。(つづく)

立正安國論講話

(第一講續)

小林 一郎

自分を生んで呉れた親の居る國、師匠の居る處へ行つて教を弘めることが恩に報ずることである。これは當然の事でありませう。だから故郷に歸ることは苦しいけれどもそんなことは構はないで、自分が初めて頭を割つた安房の清澄に戻つて、さうして法華經を弘めるといふことの第一の旗揚げをされた譯であります。

ところが御存じのやうにその日、法華經が最も勝れた經であるといふことを言ひ出されると直ぐに迫害が來た。チヨウド地頭である東條左衛門景信といふ者が清澄にお詣りに來て居てその日蓮上人の話を聞いた。東條は念佛の信者でありますから非常に怒つて、さういふ者は斬つてしまふ、といふことを言ひ出したのを漸く皆が宥め、一方日蓮上人をさとして夜分にソツと清澄を下りさせるといふことになつた。形の上から言ふと、教を弘めた日に直ぐに迫害を受けたのだからお氣の毒だけれども、日蓮上人は喜ばれた。これは愈々本物だ、迫害が來ると言

つても本當にその日に來た。法華經を説き始めたその日に迫害が來たのだからこんなハツキリしたことはない。益々以て迫害が來る以上は、法華經の中の豫言は嘘ではない。迫害が來るといふ豫言が本當であるならば、この經が弘まるといふ豫言も本當だらうと斯う思はれて、餘所からは洵にしほしほとして故郷を出て行かれたやうに見えるでせうが、日蓮上人の心の中には、愈々以て確かだ、法華經が弘まるのだ。といふ確信を懷いて喜んで故郷を出て、さうして海を渡つて相模に行かれ鎌倉の松葉谷に落付かれた。

それから鎌倉で教を説かれるのが又不器用な説き方です。ただ道に立つて、大町小町の辻に立つて往來の人に對して自分の信することを述べた。さうして法華經以外には末法の世の頼るべきものはない、といふことを説かれた。こんな又不器用な仕方といふものはない。何處か頼りになる侍のところにも訪ねて行くとかなんとかがや

つて、然るべき便宜を得て教を説いたならば、弟子も早く出来たらうし相當に勢力も出来たらうが、さういふことはチツトモしない。イキナリ往來に立つて自分の信する所をぶちまけて説かれたのでありますから、こんな下手なやり方といふものは有りはしない。併し信する所があるから出来る。そんな方法や手段などはどうでも宜い。一番良いものは最後に勝つに相違ない。果してお釋迦様の仰しやることに間違ひがないならば、そんなに教の説き方ナンといふことは見向きもしないで工夫しないでも信する通り説いたらキツト今直ぐに出来なくても、永い間には信する人も出来て来るだらう。斯ういふ決心でありますから、鎌倉に来て最も下手な方法を執られて自分の信する所その儘を説いて居られた。近頃は方々の宗で布教の講習會とかいふことをやつて、どういふ風に喋つたらうまく行くだらう……と言つて頻りにお喋りの稽古をする。私は或る所に招かれたから斯ういふことを言つた。お喋りの稽古なんぞ御々末だ。日蓮上人の流札を酌む者がお喋りの稽古をしてうまくやらうナンといふことはいかぬ。信する所があつたら言へなければならぬ筈ではないか。日蓮上人は極めて下手な布教の方法を執られたが、それでも法華經が最も良いお経だから弘まつた。方法ばかり考へてこの邊で斯ういふ類附きをしてこ

ら斯ういふいろいろな事があるのだ、この國を本當に教はうと思へば國民の信仰を正しくしなければならぬ。その國民の信仰が正しくないから天がこれを戒める爲に地震とか洪水とかさまざまの世の中に示されるのだらうといふことに氣が付きまして、どうかして日本の國民の信仰を正しいものにする爲に、先づ以て國の勢力の有る人の反省を促さう、といふ決心をされたのであります。勢力の有る人といふのは當時で申せば侍であります。これも今と時代が違ひまして昔は國民一般の教育の程度といふものはズツと低い。百姓や町人などは字の讀めない者が大多数である。自分の名前など、無論書けはしない。本なども無論讀めはしない。先づ教育の有る者と言へば、昔は藤原氏などといふ京都のお公卿様、武家時代になつては武家といふものが一番教育があつた。又國の政治を執つて居るのだから責任を持つて居る。それだから侍が右に行けば皆ソノソノと右に行く。侍が左に行けば皆惹かれて左に行く、侍の考次第で世の中の事は決定する時代であつた。これは今とは違ふ。それだから日蓮上人は侍の眼を覺ますことを第一の事と考へられた。決して侍だけを頼りにするとか、侍だけを教はうといふことではない、日本國中をスツカリ救ひたいのだけけれども日本國の運命は武士の態度で決まる。その武士の信仰

こで斯ういふ手附きをしてやると皆に受けるといふやうなそんな話の工夫ばかりしても仕様がな、といふことを言つた。江戸時代になるとさういふことが主になつた。説教の上手な人は類附きや手附きばかりになつてしまつた。昔の説教の上手な人のことを書いたのを見るとそんな事ばかり書いてあります。空から花が降るといふところをやるのに、扇をクルツと廻はすと扇が天井に上つて行つてクルクルと落ちて来る。まるで空から蓮華が降るやうに見えたと言ふが、扇をそんなに廻はすことは寄席の藝人のやることである。そんな風に布教師といふものは随分墮落したものであります。日蓮上人はさういふことではない。方法手段は考へられない。自分の信する所をその儘説かれたのであります。さうして居る間にだんだんとお弟子も出来て来るし、信者も出来て来ましてマア數年を鎌倉に送られたのであります。その内に上人の幼少の時から既にさまざまの天災地變といふものがあるつて、地震があるとか、洪水があるとかいふことは度々ありました。上人の三十六歳の時即ち正嘉元年といふ年に非常に大きな地震が幾度もありまして、殆ど前後に類の無いほどの騒ぎであつた。そこで日蓮上人は年の若い頃から考へて居られた事を今更のやうに思出された。これはどうも日本の國民の信仰が正しくない、それだか

が間違つて居れば國中の信仰が間違ふから、そこでその有力な者から眼を覺ますさせなければ國を本當に教ふことは出来ない、斯ういふ決心であつた。これは何時の時代でもさうであります。今でも多數決といふことが流行るけれども、多數決は決して頼もしいものではない。多數が集つてワイワイ言つて決めれば疎なことは決まりはしない。私は學校などでよく言ふ。皆で決めることは疎なことは決まらない。譬へば五十人のクラスがあつて、クラス會をやらう、何處が宜いだらう。さうすると方々の田舎などから出て来た東京の様子に分らない者がワイワイ言つても、何處でやつたら一番安くて旨い物を食はせるか分りはしない。ただ皆で相談して決めれば間口ばかり廣い所に持つて行く。旨い物を安く食はせる店を神田で探さうとするならば神田の様子を能く知つて居る人に頼むが宜い。本郷でやらうとすれば本郷の様子を知つた人に頼むのが一番早い。大勢でワイワイ言つてやると結局間口の廣い所ばかりを探すといふことになる。やはり世の中の事は指導者がなくて多數決では決してうまく行く筈のものではない。いつの時代でもさうであります。やはり頭の良い人、智慧の有る人が先に立つて正しい道を選んで、他の者はこれに率ゐられて行くといふのでなければ本當の事は出来るものではありません。併し今で

は何も或る階級だけが、昔の武士のやうな階級だけが、指導者ではありませぬから、若し日蓮上人が今出られたらそれは政府でも民間でも相當な考の有る頼もしい人に立正安國論をお示しになつたらうと思ふのであります。今出て来られれば必ずしも總理大臣に立正安國論は出されないうでせう。けれども、昔は時代が違ひますから、そこで侍を覺醒しなければならぬ。侍の中では北條執權といふものが一番勢力が有るのだから、そこで北條に立正安國論を出された、斯ういふことになるのであります。

體面の上から言へば、京都の朝廷を差控いて陪臣であるところの北條に出されたといふことはをかしい事だけれども、それは體面より寧ろ實際のこと、實際國を動かすには侍を良くするより外ないから、そこで侍の棟梁として仰がれて居る北條執權に出された、斯ういふことになるのであります。それも時の執權よりは寧ろ隱居はして居るが、最明寺入道時頼といふ人が大事な事は皆決定して居るのだから、そこで前執權であるところの最明寺入道時頼の反省を促す爲に、立正安國論といふものを書かれたのであります。併しながら何事にも容易周到なる日蓮上人でありますから、萬一にも自分の考へ方に何處か間違つた事があつては大變だといふので、三十六歳の時に駿河の岩本の實相寺といふお寺に、この寺には一

切經がスツカリありますから、この實相寺に行つてモウ一遍一切經を調べ直し自分の信する所が間違ひないといふことを突き止められて、三十九歳の七月に立正安國論を書上げて前執權の北條時頼に送られるといふことになつたのであります。この筋道は大體の方は御存じでありませうが、併し斯ういふものをさう輕々しく書かれたものではない。以上のやうな筋道を取つて、どうしてもこれを書かなければならぬといふ場合になつて安國論といふものを書かれたのであります。

それで安國論の本文に就てはこれからだんだん讀んで参りますが、大體に於ては「立正安國」といふことは、正しい法を立てて國土を安んずる、といふことであります。國を安らかにする爲には人間の心を眞先にしなければならぬ。我國は日蓮上人も仰せられた通り八萬の國にも勝れた尊い國ではあるが、國が尊ければ尊い程この國が本當に善くなる爲には國民が皆善くなければならぬ。ところが人間の心には煩惱といふものがある、迷ひといふものがあるから、その迷つて居る人間が多い間は國が善くならない、そこで人間の心の迷ひを除く爲には正法正しい法を立てなければ除かれぬ。だから正法を立てて人の心を正しくすることに依つて國を安らかにしよう斯ういふのが所謂立正安國であります。これはいつの時

代でもさうでなければならぬ。佛教といふものも方面が廣いものでありますから、今でも家の繁昌とか身の繁昌を祈る爲に佛教を信する人がある、或は頭が痛いとか足が痛いのを治して貰ふ爲に佛教を信する人も多いけれども、併し佛教の本當の精神は人間の心を正しくすることである。人間の心を正しくしないで國が盛んになるものではない。國が幾ら物質的に盛んであつても人の心が亂れて行けば衰へるものである、甚しくなれば潰れるものである。國を善くするのにはどうしても國民の心を正しくしなければならぬ。人間の心を正しくする爲には最も勝れた教の力に依らなければならぬ。その教の中に於て何が最も勝れて居るかと言つて佛教ほど勝れたものはない。だから佛教を信することが人の心を正しくする一番良い道である。國民の心を正しくすることが即ち國を安んずる根本である。斯ういふところから立正安國、正しきを立てて國を安んずるといふ言葉が出て來て居るのであります。それは日本では聖德太子の時以來さうであります。聖德太子以前の佛教は所謂禰を祈る佛教でありま

す。聖德太子が二十一歳で攝政にお成りになつて四十九歳まで佛教を非常に御奨励になつた、その御趣意は人々の心を正しくするといふことであります。太子の憲法の中に

其れ三寶に歸せずんば、何を以て枉^かがれるを道^ちうせん
とあります。佛の教を信じなければ心の枉^かがつたのはま
つ直ぐにならぬといふことでありまして、即ち立正安國
といふ言葉は聖德太子は使つて居らつしやらないが、聖
德太子の佛教を御奨励になつた御精神は立正安國である。
(大綱)

大 八 木 義 雄

原 田 上 人 弔 歌

廣く世を救ひたまひぬ子のために

とどめ置かれし薬のませて

やみてなほ人の教となりし身を

召されたまひし今日ぞ悲しき

本佛實在の宗教哲學 (廿六)

河合 陟 明

十八、個佛の統覺における有始と無始との統一 (承前)

さきに有始の全智全能といつたが、單に有始の實在と認識とは、未だ決して全智でもなく全能でもない。これに反し、佛陀の開覺が、無作の先驗的根柢を盡して知るといふことは、同時に、その無作根柢に於て成立するところの、或は無作本有の場所に於てあるものとしての、無始以來のあらゆる *manifoldes* 雜多なる限定の相をも、また盡して知る、即ち全法界歴史的现象をも、また悉く知る、といふものでなければならぬ。其は實に、單に人類歴史とか、世界歴史とか、地球の歴史とか、太陽系の歴史とか、星雲の歴史とか、はたまた單なる感覺的宇宙、否、感覺プラス數理的なる宇宙、すなはち肉眼における視角作用の延長たる望遠鏡的觀察に加ふるに、嚴密なる高等數學の計算を以てしたる、いはゆる天文學的宇宙空間とかいふものを、知るといふ如き渺たる小事ではない。然りこれらの總ての畢竟するに人智の範圍に錫請し、人智の範圍を超脱し得ざる、即ちいはゆる有限的理性に過ぎざる人間知識において、これらの歴史的知識とか、科學的知識とか、哲學的知識とか、畢竟するに有限相對なる時間空間の圍内を、髣髴として推論するとか、測量するとか、旋轉するとかいふ如き、渺たる小事ではない。

すべて吾々の知識は、吾々ないし宇宙萬有の存在根柢たる——したがつて吾々個々萬有に内在してこれを内面的に貫流すると共に、これを包みこれを於てあらしむるところの場所としての超越的普遍根柢たる——一絕對の眞如法性の、無限の内包量、無盡の埋藏量の *Konzakultionsbestimmte* 濃度測定であり、その積聚量である、或は開發量であり、掘發量である。しかしその眞如法性の内容とは、實に十法界三千といふ無限に多様な異質的世界の、また更に量的無限に多なるものである。しかるに吾々の知識は、殆どその十界中の一界たる人界の質と量なる範圍を出でない。もちろん他面から見れば、吾々の理性は、たとひ有限とはいへ、眞の佛性なるものの一分であるともいひ得やう。たとへばカントの *reine Vernunft* 純粹理性とか *praktische Vernunft* 實踐理性とか *Dialektik* 判斷力とかいふ如き、分裂的なる理性論、すなはち宇宙の本體たる *Das an sich* 物自體に對し、純粹理性よりしては不可知を叫び、ただ漸く實踐理性よりしてのみその *Noumenon* 睿智の本體を神として要請し、否、靈魂の不滅も意志の自由もないし直觀悟性も、すべてただ實踐上の要請として示すにとどまり、而してかくの如き眞の形而上的根柢を有たる *postulata* 浮動的なる存在界において、わずかに判斷力の對象として、美や崇高や有機體や世界や人生の歴史的目的を論ずるに留まりしが如き、いはゆる別教隔歴的見解を脱せざる分裂的理性論すら、なほ佛性の一分の領域に進み入れるものであつて、その *transzendent der Natur* 自然の律法者としてのコペルニクスの轉回は、吾々の眞の人格性、すなはち價值的、否むしる根本的に自覺的なる、佛性的人格の *quid juris* 根柢を確立したるものといふことができるであらう。

況んや彼の思想を眞に *übergehen* 超越し *überwinden* 克服して、いはゆる純粹理性も實踐理性もないし判斷力をも、すべて一に融し一に統して敢て分たざる、眞の調和的・統一的なる——否むしる其はその本來性においてかく統一的なる——理性の *Vernunft gebirg* 理性使用をもつて、然りかゝる理性使用の妥當なる所以の *Realbegründung* 權利根柢を十分に有するところのものとして、その理性の嚴密なる推論を行使することによつて、堂々成立するところの「己心本有の形而上學と宗教」——すなはち佛敎實在論の根本原理たる唯心論あるひは由心論を、一大發展せしめて天台獨歩の否むしる佛敎獨特の實踐哲學的認識論たる觀心法門にきたらしめ、而してその觀心の眞意味は觀心具にあり、即ち觀心具三千にあり、ここに觀不思議境としての一念三千が成立するのであつて、しかもかゝる天台獨歩の觀心法門としての摩訶止觀が、かく一念三千といふ廣大無邊なる絕對法界としての組織と規模と背景とを有するにも拘らず、なほ遂にその實際の *Methodenlehre* 方法(論)としては、その廣大法界なかんづく價值的實在として宇宙目的として絕對無限なる佛法界を殆んどその己心の圍内より切り棄て、然り己心の信仰の對象となし得ず、ただ單に無明的なる十境に對してのみ十乘觀法を行ずるといふ、單なる己心性具の佛性を反省し(入空)志向し(入假)

直観する(入中)といふ、狭小なる意味と範圍における、然りただ遂に狭小なる意味と範圍を出でざりし如き、「己心佛性論」の範圍を突き破つて、己心の意味・唯心の意味・一心法界・一念三千の眞意味を、その論理的プラス實踐的發展の極度に推し進めたる、眞乎の觀心法門・眞乎の觀不思議境・眞乎佛敎本來なる「觀心哲學の宗教的完成」として、かの時空無限なる絶對法界を我が一念の己心！然り大己心に包攝したるのみならず、特に鮮かにその常恒の中心を明示しては、無始實在の本果妙たる常住の本佛と、およびその依報の本國土妙たる本時の娑婆世界なるものとを、我が己心の内奥の移々たる、神秘境に觀する、すなはち一言にしていはば、法界實在の本尊を我が己心の内面に拜する、「觀心本尊の宗教哲學」、然りいはゆる。

今本時娑婆世界、離三災出四劫、常住淨土、佛既過去不滅、未來不生、所化以同體、
此即「己心」三千具足三種世間也

といふ四十五字法體に示さるる如く、本佛中心の圓慧的法界を、我が一念の「己心」我が信仰的「己心」我が感應的「己心」に包攝したつて、その神秘なる靈交を實證・體驗するといふところの、「觀心本尊の形而上學と宗教」——なるものこそ、眞にかのカントの理性的推論の不徹底に終りし純粹理性の *Vernunftgebirge* 理性使用を、正當に行使用して、然り己心本有の内容・己心生産の内容に正當に適用し行使して、否、一切は悉く己心の本有たり、己心の「*Ich*」述語たり、己心の創造的生産なるが故にこそ、この己心の内に於てあるところの眞の物自體たる無作本有の眞如に對しても、また眞の神たる無始本有の本佛に對しても、總て正當なる理性使用としての「己心の統覺」が行はれ得るのであつて、從つてカントの遂に拋棄したる如き全領域に對して、今や倣に堂々として認識論および形而上學が成立し得るのであり、かくて「觀心本尊」といふ一箇摩訶不可思議の大哲學・大宗教・大形而上學的根據に立てる信仰こそ、佛敎實在論の最後の完成にして且つ佛敎實踐門の最初の出發點をなすものであるのみならず、東洋においては古代の天台の三大部、西洋においては近世のカントの三批判といふ、二大代表的、かつ唯心内界と外界自然とにそれぞれ眞理探究の發足をなせしといふ、全く對蹠的なる二大認識論のシステムを、しかも其がまたおのおの特有なる形において、宇宙における絶對の人格實在たる本佛あるひは神の問題に對し、不徹底なる歸結に終りしものなのであるが、その不完全なる哲學と宗教を、この觀心本尊といふ我が日蓮聖人の形而上學プラス宗教こそ、最高の立場よりまた最高の立場に、まさしく批判し開闢し統一するものであることを知らねばならぬ。

この點に就ても、予はもちろんで以下順序を遂うて、その正しき批判と開闢を展開する。まことに大覺世尊が「妙法蓮華經」と説かれ、日蓮聖人が開目鈔にその妙法の一貫二面の宇宙的大法則性としてプラス大目的體系として「本因本果」と呼ばれ、本尊鈔において更にこの妙法の實在の三層建築として「觀心」本尊」といふ論理的プラス實踐的構造を示され、また十法界鈔においても「本覺本有」といひ「本途常住」といふ本佛統覺と應身常住の哲理を明示され、恩師がさらに一言にして「本佛の圓慧觀」と叫ばれ、予がさらに「妙法・二因果・三觀心本尊を四門に開いて」「法性・佛性・個佛・本佛」すなはち「性・修・證・應」なる本有哲學の四門體系となし、ないし後述する如く「本佛構造の五双十門」、「本佛實在の十二緣起」等といふは、皆脈絡一貫の一大眞理體系を物語るものである。然しながら茲にあらかじめ一言すべきは、かの山川智應氏の觀心本尊論は、遂に、我が日蓮聖人の御妙判を正解し得たるものでない。氏の己心論然り氏の論理は別教分裂的であり、或はまた本佛果上に約したり行者の己心に約したり等して、詭辯的であり、遁辭的であり、而して遁辭はその窮する所を知る、これ敗者の論理である。されば氏は大聖人が心血を注ぎ魂魄を留められし神韻賦々たる絶世の遺文を、正當に理解されず、信解されず、否、寧ろ根本的に正當に讀むことをせられざる文法上の誤謬に至つては、苟くも大聖人の御遺文の眞價と權威に關する事ともなり、遂に天下有識の人士よりして指揮せらるることなからんかを、予は憂ふるものである。更にしかのみならず、氏は、否、山川氏といひ清水龍山氏といひ共に、そもそも佛敎究極の最高實在たる「本佛」下、然り觀心本尊の觀心といふこともさることながら、更に一層、絶對絶命の問題たる「本尊」そのものの正體に關し、二氏等はつひに到底、嚴密精緻・確乎不動、奪ふべからず易ふべからず抜くべからず減すべからざる眞理の根柢に立脚せる、宇宙間眞乎の絶對人格としての「本佛の實在」を信解されたるものではない。それは遂に一箇の獨斷説なるに歸するのみ。すなはち日蓮聖人學生の大主張たる「法身常住と報應顯本」といふ佛身觀上の嚴密なる析別と統一を辨へざる、一箇の混淆説に墮するのみ、しかも一層大なる規模においてこの大聖人の主張を言はば、これこそ實に、東西古今にわたり、即ち全人類思想史を大觀し來つてその *religious knowledge* 解きがたき咒縛たりし、眞の *quid juris* 根據と *quid facti* 事實」なるものを明かにし據つて以て眞乎宇宙的絶對者の眞容を知らしむる「神の概念のコペルニクス的轉回」をもたらしむるもの、然り全く新たな

る「神の存在の證明」をもたらしものである。大東亞、否、世界新秩序の黎明は、ここにおいて始めて燦然としてまづ皇國の頭上より輝き出づるであらう、經に云く「今正是其時」……何ぞ闕らん氏等が、我等の恩師聖應院日生上人の純正日蓮教學を論難せらるるが如きは、全くその謂れなし。惜しむらくは清水氏すでに逝けり。さりながら予は、これらの所謂門下の學匠が、その地上にあると地下にあるとを問はず、眞に佛祖三寶の威靈に觸れて、眞乎純正なる本化別頭の教觀に開眼せらるるの日あらんことを、祈つて止まない……。

なほ予の本佛論の大綱に關しては、法華誌上における「本佛の教學」(昨年十一月より本年五月に至る、六回完結)を参照せられんことを望む。しかしもちろん今この統一誌上における本論説は、其を一層詳細に論明せんと欲するものである。また哲學研究誌上における「本佛の哲學」は、予の或は昭和の開目鈔ともいふべきものなることを予は信じ、もつて本佛實在の秘門に到達すべき必須の前段階として、まづ主として佛教諸宗の、乃至傍ら西洋哲學的思想の批判とその概略的開顯の相を、論述せんとするものである。否、さらに重大なる一語、この觀心本尊なるものを、ただに吾人一個人に於てのみならず、まづそもそも我が日本國家・日本民族そのものをして「觀心本尊を行ぜしめ」進んで全世界をして全人類をしてまた遂に「觀心本尊を行ぜしめ」といふ所にこそ、いはゆる「世界史の哲學」的規模における眞の觀心本尊の意味があり、眞の一念三千の意味があり、然り「立正安國」といひ「天四海皆歸妙法」と誓願するところの眞の意味が存するのである。而して知れ、我が大東亞戰、然り佛祖の降魔成道の日に火蓋を切りしこの大東亞降魔戰は、實にかかる意義と權威と同時に日本國家に對する無限の宿題を課したるところの「本佛感應の戰」なることを、皇國の民は知らねばならぬ。果然ここにおいて本化上行・地涌菩薩は、然り眞乎「本佛の本臨土」たるべき本化の菩薩は、現代にもあり、現代にもあり、昭和今日の聖代にもあり、ただに七百年の過去にのみその上行の自覺を求むるなかれ、本佛を擁護して大法を光顯する淳善の佛子・護法護國の法將は、これ實に昭和聖代の大東亞戰下における本化地涌の菩薩たらざるべからず！かくの如き己心の本有およびその無明的不有を破つて現るる今有の自覺としての創造的生産内容に對する正當なる *Vornunft-gebirg* 理性使用としての形而上學的認識と、而して更に、それにも拘らず人智は固より有限なるものであるが故に、その有限性を超越したるところにおいて依然として承認せらるべき一種の實踐理性の優位としての *Vornunft-Idee* 理性觀念の對象界として展開しきたる宗教的信仰の境地との、

この二面——もちろんかく理念とはいふもカントと同一ならず、實在の論理において天地懸隔せるものなることは、いふまでもない——即ち、「觀心本尊の形而上學と觀心本尊の宗教」とは、苟くも人智の、或は人間生命の、運命および使命を物語るものとして、あらゆる科學・哲學・宗教等と發展しゆく知識客觀性の系列の最終項をなすものであつてそこに彼危機神學のブルンナー等の主張を全く開顯の意味において救済する眞の *Charakter der Dinge* 信仰客觀性が成立するのであるが、しかもこれら總ての、人智の全體系を構成する眞理の開發と眞智の積聚は、さりながら遍滿法界の絕對的質量たる大眞如海に對しては、僅かにその一滴にすぎず、一微塵にすぎず、殆んど無限小ともいふべき微分量にすぎず、それを衆生の五蘊といふ。しかるに無明を全く斷破し了つたる佛身なるものは、全く法性そのものの五蘊である、法性すなはち法界の本性すなはち根本實在の全質量を、全く「己心の中に統覺」し、個性人格において體現したる、生死超脫の高次の實在・救智的超時間性に上れる高次的現實存在として、常住實在の無變易なる五蘊身であるのである、即ち眞如そのものの、また眞如そのものよりの如來なのである、如是來なのである、如是如實智なのである。しからばかく眞如法性そのものを全うし、その無限の全體を體現したる佛果の如實智の、*Ontologisches* 決定投標たるべきものは何か。いはゆる

從眞如實相中來、而得成三佛道、故名三如來、論其橫豎、照三無限極、如三函大蓋大也、以三無限故、
 名爲三無碍。(法華文句九)

といふところの、權實不二・理量不二なる佛智・絕對智の決定權を與ふるものは何か。それは實に、宇宙萬有の存在の無始の實相を知る、全存在の無始以來の歴史を知る、といふことにおいて始めて佛果菩提における如實智の極致として、否、如實または如理智と同時に如量智の極致として、すなはち全宇宙の本體および現象の全認識として、その無限大の統覺として、始めて眞の絕對の智といふことができるのである。

當知、此四菩薩、現折伏時、成賢王、誠實聖王、行攝受時、成僧、弘持正法……此時地涌千界出現、本門ノ釋尊ノ、爲臨土、一闍浮提第一本尊、可立此國、天台云、見雨猛知龍大、見花盛知池深、天晴地明、識法華者有可得世法眼
 南無妙法蓮華經 昭和十八年七月八日 大詔奉戴日 加之、文永十年佐渡一ノ谷において、日蓮聖人が始めて
 闍浮第一の本尊大曼陀羅を顯發せられたるの吉辰。

記事

本部 團報

七月八日 大詔奉戴第廿回記念の此日は文永十年の昔、日蓮聖人が佛勸を奉じて末法の爲に始し與へらるべく、始めて一念三千の法門を撰りすすきて書き顯はされた御本尊光顯の極めて意義深い聖日である。皇國未曾有の大事である今日、上下を通じて須らく菩提心を發して此の御本尊に祈請をこらすべきであるまいか。日蓮聖人延山より東條新尼御書の中に左のやうに書き與へられてゐる。

此の御本尊は、天竺より漢土へ渡り候ひし數多の三藏、漢土より月氏へ入り候ひし人人の中にも記し置かせ給はず。西域慈恩傳、傳燈錄等の書どもを開き見候へば、五天竺の諸國の寺の本尊皆しるし盡して漢す。又漢土より日本に渡る聖人日域より漢土へ入る賢者等のしるされて候寺の御本尊、皆勸へ盡し、日本國最初の寺、元興寺、四天王寺等の無量の寺の日記、日本記と申す書より始めて多くの日記にのこりなく註して候へば、其の寺の御本尊又かくれなし、其の中に此本尊は有てまします。人笑つて云く、經論になさか、無ければこそ若干の賢者等は畫像にかき奉り、木像にもつくり奉らざるらめと云云。しかれ共經文は眼前なり、御不審の人は經文の有無をこそ尋ねべけれ、前代につくり書ぬを難ぞ

を身に帶し心に在せば、諸王は國を去け、國民は難を通れん乃至後生の大火災を説るべしと、佛記しおかせ給ひぬ。等云々八日の曉天、大衆一結御寶前に熱誠を捧げてから、國民儀禮後續言理事より「彼を知り我を知る有益な講話あつて八時前教會五關文會 大詔奉戴第二回の此の報恩會を迎え、十一日日曜日午後二時より營んだ、本年は昨年より以上の新發供養があり、和賀、山口、小西、本郷等の諸師、滿堂の團員有志一九となつて無上の法味を回向し、かねて申遣された各家諸靈位の追福供養燒香した。

凡そ精進に對しての追善法要の如何に大切であるかといふ事は、先徳の委懇慈誨に明かなる處、今日は更に此點を再認識すべきが肝要と思ふ。聖訓に「衆生の業力は佛力に勝るといへば業因感果の道理必然たれば、佛の御慈悲も叶ひ難き故に、悉くも大悲の御胸を無し奉る。我等不信無志の不孝の身となる事悲んでも餘りあり。乃至孝子善友をなせば、亡者罪人なれども地獄をまぬがる也」ここに五關益法要は、佛弟子目連尊者が善業を修して、惡道にあつた慈母曹提女をお救ひした報恩の事實教範である。而かもそれが初めは父母の一苦を脱れしめたが、未だ成佛の道へは達し得なかつた、後に法華の會座に於て彼が多摩羅刹佛檀香佛の授記を得た時に、父母も成佛されたといふことは特に注目すべきである。不信諸法の徒は、業因感果も辨はず、亡靈の前途も知らず、本師の實在も信せずして唯今日生きたんが爲に焦慮するばかりである。然るに現在に殊に死といふことに就て充分に徹底しておくことが最も肝要であるまいか、此處から一切の善根功德の活動が發る。兩三日間、岩瀬部隊長から「六月十五日の吉日を下し南太平洋某島の一角に地を相し、

んと思ふは條案なり。例せば、羅迦佛は慈母孝養の爲に、利天に墜れさせ給ひたりしをば、一團淨提の一切の諸人しる事なし、但目連尊者一人此を知れり。此又佛の御力也と云云。佛法は眼前なれども機なれば顯れず、時たらざれば弘まらざる善法爾の道理也。例せば大海の潮の時に隨て増減し、上天の月の上下に盈虧るが如し。今此の御本尊は、教主願尊五百應驗功より心中に收めさせ給ひて、世に出現せさせ給ひても四十餘年、其後又法華經の中にも迷門はせずして、寶塔品より事起りて壽量品に説き顯はし、神力品・闍果に事極りて候ひしが、金色世界の文殊師利、兜率多天宮の彌勒菩薩、補陀落山の觀世音、日月淨明德佛の御弟子の藥王菩薩等の諸大士、我も我もと望み給ひしかども叶はず、是等は智慧いみじく才學ある人人とはひびけども、未だ日淺し學も始めたり、末代の大難忍び難かるべし、我五百應驗功より大地の底にかくし置たる眞の弟子あり、此に譲るべしとて、上行菩薩等を涌出品に召出させ給ひて、法華經の本門の肝心たる南無妙法蓮華經の五字を譲らせ給て、穴賢々々、我波度の後、正法一千年、像法一千年に引通すべからず、末法の始に謗法の法師一團淨提に充滿して諸天のかりをなし、慧星は一天にわたらせ、大地は大波の如くをどらむ、大旱魃、大火、大水、大風、大疾病、大飢饉、大兵亂等の無量の災難發起り、一團淨提の人人、各各甲冑を著て弓杖を手に握らむ時、諸佛、諸菩薩、諸大菩薩等の御力の及ばせ給はざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮つること雨の如くしげからん時、此五字の大變茶羅

祭壇を設け雪原の慰靈祭を嚴修致しました。……兵團長閣下以下多數來賓の御賞臨を得、天候もよく嚴肅程に盛大に式典を終了致しました。云云との御報を得て、自ら合掌唱題した。かの中澤とか寺澤等といふ數多の勇士達を出された有名な部長長、その半面に於て此の尊い佛事供養の誓まらる、其處に眞の日本精神が燦然と輝いてゐるではありませんか、有難い感激に胸は一パイになつた。老子の「慈なるが故に勇なり」である。さて本部御寶前に於ける幾多の清信士女は、小林先生の「報恩の思想」又禮部理事の「決戦と一乘の教」に就て暑熱を忘れて傾聴し、四時半頃散會。

其他 聖典講座、信行會、はち十婦人會等の記事は紙面の都合で割愛させて頂き、各位の御信心御増進をいのる。

福島支部報

七月一日 木曜日午後三時過から、真商如春社に於て例會を催し、磯前先生により「學徒の勳員と實業の一善」に就て、初め敵航空搭乗員の八割が學生出身で、僅か四十八週間の訓練を経て米國魂を發揮しつとあると後等の性格を五ヶ條程挙げて其長短を指摘し、進んで我輩國の大理想實現は諸君にありとして、人格と生活技能及び物心の調和を懇説された。五乘開會法華一乘の妙旨を述べて信行に歸結された。司の會 兼て支部員の篤信の方から、佛敎の體系のお話を聴聞いたしたいとの希望があつたので、今晚から「佛敎の心髓」を教科書にしてお話を頂く。佛敎の固々な深理は、我々のやうな小知の者の窺知する處ではないけれど、併し心に邪念なく自我を出さないで、柔和寛直で信樂し受持せんと思ふ。今夕は特に最近大任を完へて除隊された渡邊氏が、積年練はれた隆々たる筋骨を提げて來會されたのは爲法國策に頼もしい限りであつた。

團費誌料維持費及寄附金額收 (自六月二十二日 至七月二十日)

一金五圓也	大阪	池田	政殿
一金二十圓也	東京	濱山正三	殿
一金十六圓六十錢也	東京	虎谷喜太郎	殿
一金三圓也	東京	宇野博	殿
一金一百五十圓也	東京	大下正人	殿
一金二十圓也	同	山本禮三	殿
一金二十圓也	東京	高橋謙太郎	殿
一金二十圓也	青島	竹原實	瑞殿
一金五圓也	福島	渡邊雄吉	殿
一金五圓也	東京	山田英二	殿
一金二圓五十錢也	同	藤澤春子	殿
一金三圓也	同	原 恭一	殿
一金五圓也	同	佐藤愛子	殿
一金卅二圓五十錢也	同	金澤利江	殿
一金二圓二十錢也	福島	山田珂子	殿
一金一圓二十錢也	東京	小澤玄	殿
一金二圓五十錢也	同	高橋福一	殿
一金十圓也	同	何 某	殿
一金五圓也	福島	菅野康太郎	殿
一金五十圓也	北支	種村五郎	殿
一金二圓五十錢也	東京	佐藤大太郎	殿

一金二圓二十錢也	姫路	林 辰	正殿
一金二圓二十錢也	岡山	岡野ヨキヨ	殿
一金十二圓二十錢也	東京	井上知孝	殿
一金四圓十圓也	同	夫榮印刷所	殿
一金五圓也	水戸	前刀實清	殿
一金二圓二十錢也	愛知	藤田正雄	殿
一金一圓二十錢也	大阪	大瀬伊太郎	殿
一金十一圓也	東京	野口英司	殿
一金十圓也	同	榮田武治	殿
一金二圓五十錢也	同	吉村頌治	殿
一金五圓也	大阪	徳永熊彌	殿

右雜有入帳仕候也 (以是領收證代用)
財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖 語 錄	改 版 特 價	金壹圓九拾錢
法華經要義	賜天覽 同	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	同	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	同	金參 圓
法華經要品	同	金五拾錢
本尊意識に就て	同	金貳拾錢
法華經の心髓	同	金壹圓五拾錢
黎明の原理	同	金五 圓

嶺南諸事叢書

本多日生上人	特 價	金壹圓七拾錢
勸行作法	同	金拾 錢
佛教の心髓	同	金壹圓

河合勝明著
皇道と日蓮主義

定價 金壹圓

東京都小石川區香羽町六ノ十七
財團法人統一出版部
接替東京九四〇番

統一團 定價
一冊 金貳拾錢 送料壹錢
半ヶ年 金壹圓貳拾錢
一ヶ年 金貳圓貳拾錢 送料共
〇〇御申込ハ總テ前金ノ事
〇〇前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
〇〇御購得ノ場合ハ必ず新聞共ニ御通
知ノ事

昭和十八年七月二十七日印刷
昭和十八年八月一日發行

發行所 東京都小石川區香羽町六ノ十七
編輯人 磯部 滿 事
東京都西谷區内藤町一
印刷人 山田 英二
東京都小石川區香羽町八ノ十一
印刷所 野島好文堂印刷所
東京二〇五二

發行所 財團法人統一團
電話牛込五三三六番
東京都神田區淡路町二丁目九番地

配給元 日本出版配給株式會社



目 次

○本部國報	○福島教信	○入帳報告	修養の大要(二).....本多日生
記事	啓發錄.....橋本左内		立正安國論講話(第一講了).....小林一郎

第四十八年九月號